

保育北九州

平成28年10月1日

発行 (一社)北九州市保育所連盟
〒805-0019
北九州市八幡東区中央2丁目1-1
(レインボープラザ5F)
電話(093)661-2153番

発行人 酒井光義
編集人 日野真人

2016 185



みんなとゲームしたよ！
「うまくとべるかなあ。」

〈提供 戸畑支部〉

(5歳児の作品)

表紙	1
第3回九州保育三団体研究大会	2～5
研修・一期一会	6
支部近況	7
雑感・編集後記	8

第3回九州保育三団体研究大会

「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ 社会の実現をめざして」

平成28年4月に熊本を中心として発生した大地震の爪あとも生々しい中で大会は、開催担当市として実施すべきかどうか随分と戸惑い、躊躇することもありました。しかし、復興への願いを込めて大会を開催しようと決断し、関係各位の了解を求め、7月20日～22日の3日間に亘り、北九州ソレイユホール・リーガロイヤルホテル小倉・北九州国際会議場を会場として開催しました。

子ども・子育て支援新制度施行後、一年の歩みで生じた課題や、とりわけ評議員等の設置について論議されている社会福祉法人改革など、大きな転換期を迎えている中での研究大会となりました。

第1日目の式典は、熊本地震等に伴う物故者に対する黙祷を捧げ、その後主催者の佐藤成己会長、松元照仁北九州市副市長、戸町武弘北九州市議会議長、近藤適全国私立保育園連盟会長の挨拶をいただきました。表彰式では、九州社会福祉協議会連合会会長表彰105名、九州保育三団体協議会会長表彰33名、同功労表彰7名の方の表彰が行われ、被表彰者を代表して佐賀県保育



会前会長の田中豊博先生が謝辞を述べられました。

続いて、厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課 社会福祉法人

制度改革推進室長 田中徹氏より「社会福祉法人改革について」と題しての基調講演をいただきました。現在、私どもが最も知りたい、そして理解をしなければならぬことを分かりやすく説明していただきましたことは大いに意義あるものでした。

1日目の日程終了後、リーガロイヤルホテル小倉に会場を移し、松元照仁北九州市副市長、近藤晃北九州市子ども家庭局長をはじめ、多くのご来賓に参加いただき、550名余りの参加者の下で交流会を開催いたしました。

今回の大会では「おもてなしの心を大切に：」をモットーとして皆様方をお迎えすることとしておりましたことから、ご参加

いただいた方々から素晴らしい交流会でした、との賛辞をいただいたことは、今大会開催に携わった者にとりましては、身に余る光栄の極みでした。なお、各組織から差し入れて下さった銘酒に舌鼓をうちながら、和氣藹藹とした中での情報交換はこれまでになかったもので、今さらながら強烈に印象に残っております。

2日目は、北九州国際会議場とリーガロイヤルホテル小倉の



2つの会場で、8つの分科会と1つの特別分科会を開催しました。

第1分科会から第8分科会については、午前中に各会場で3名の意見発表者から、設定されたテーマについての発表がなされました。その発言要旨を中心に発表者と参加者が一体となつて討議が交わされ、その内容に対する問題点や疑問点について、助言者から適切な提言や助言をいただくという中身の濃い



分科会が開催されました。

なお、午後からは午前中の討議の中で積み残された課題について、助言者を中心にしてそれぞれの分科会におけるテーマに即して、グループに別れてのさまざまな研究・討議が深められたことは参加者すべてが満足できる研修会であったと、評価する報告がされておりましたことは申すまでもありません。

特別分科会では、園長を中心とした260名が受講しました。午前中は、全私保連常務理事平野弘和氏から、現在最も注目されている「新たな制度と今後の課題について」の講演がなされ、特に「新制度は国家戦略としての少子化対策の一環であり、財源確保と併せて制度を改革するものであり、その根底となるものは、『子ども・子育て支援新制度』を持続性の高い施策とし、人口減少社会がもたらす国力の低下—ひいては、社会保障制度の形骸化は国民全体にとって喫緊の課題」と発言されました。また、「中央と地方自治体、それに現場

が三位一体となつて改善し作り上げていくことが、われわれの未来そのものである子どもたちの育ちへ繋がる」との提言に共感の声が洩れていたことは、参加者にとって心に残る一言だったと確信しています。

午後は、コーディネーターに平野弘和氏、シンポジストには東京都民間保育園協会事務局長長田朋久氏、東京都三鷹市長の清原慶子氏、九社連保育協議会保育士会長北野久美氏の3名をお迎えし、「子ども・子育て支援新制度について」のシンポジウムを開催しました。

長田氏は「子ども・子育て支援法の公定価格から見た課題のポイント」について職員処遇の改善が最重要課題と位置づけ、給与改善のための恒久的財源確保が喫緊の課題とし、少なくとも現行給与の5%UPの処遇改善を求めていくべきと提言されました。また、職員配置についても子どもの年齢別の配置基準を見直すことも必要であり、職員の確保・定着やキャリアアップは財

源確保と不二の関係であると指摘されました。

清原氏は、「基礎自治体の視点から見た制度と今後の課題について」と題し、子ども・子育てについて先進的取り組みについて話される三鷹市の施策について話されました。特に「新制度において子ども・子育て支援の実施主体として基礎自治体が大きな責任を担うことになった」と強調されました。量的拡充と質的拡充は表裏一体であるべきとの提言には心打たれるものでした。

北野氏は「保育の現場から子ども・保育者・保護者」キャリアデザインを視野に入れての発言がなされ、北九州市の保育の実状を丁寧説明され、現在の課題として保育所保育の仕事は現保育所保育指針をガイドラインとし、「チームで行う」ことを強く意識していることが述べられました。また、キャリアアップをしていく上では、職員がそれぞれでふりかえり「協働」しつつも、その中でスキルアップし、キャリアパスに繋げていく視点

に重要性を感じる事が強調されました。

3人の意見や提言を平野氏は特に、キャリアパスについて自園運営にどのように反映させているか、職員の給与アップだけがキャリアパスではない、また、自治体としては役職や給与にどのような形で反映させるようにするのか、また職員のモチベーションを高め、達成感を意識していくけるようになるのかもキャリアパスではないかとの発言がなされ、時宜に即した意義のある特別分科会となりました。

3日目は、白梅学園大学・同大学院、教授・研究科長 無藤隆氏による「今後の保育の体制とその向上に向けて」と題しての記念講演が行われました。

子ども・子育て支援新制度における保育所(園)・幼稚園・認定こども園等の整備についての現状分析、これからの待機児童対策についての見解が示され、今後保育所と幼稚園が統合したものと認認定こども園化していくことが不可避との所見が述

べられました。なお、このことと併行して保育所(園)・幼稚園・認定こども園等を合わせて「幼児教育」としてその質の向上を図る試みが始まったことが話され、また、幼稚園教育要領・保育所保育指針の改訂が進められていること、これからの幼児教育は小学校以降へと繋げ、幼児教



育で育った力を伸ばしていくという視点を重視する必要があると指摘されるなど、現在、保育所(園)が抱えている諸課題について示唆されたことは、今後の保育所保育はどうあるべきかを改めて問い直された講演でした。

この後の総会では、大会宣言の朗読・採択、次期開催県(長崎県)の決定、九州保育三団体のシンボルフラッグの引継ぎが行われました。

そして、閉会式での開催市実行委員長 橘原淳信の感謝の言葉をもって3日間に亘る研究会を終了しました。

最後に、本研究大会で採択された大会宣言文を掲載します。第1回研究大会から引き続き「九州らしさ」を示した宣言文とさせていただきます。

採択後は、全国保育三団体をはじめ、国・九州各県(政令市)の子ども担当部局に送達しました。

(橘原淳信/第3回九州保育三団体研究大会実行委員会委員長)

大会宣言

「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」をテーマとして、ここ北九州市において、第三回九州保育三団体研究大会を開催することが出来ました。

子どもを取り巻く環境が大きく変動する中、九州各県より千五百名以上の保育関係者が集い、熱き討議を繰り広げました。

平成二十七年四月に「子ども・子育て支援新制度」が施行され一年余りが経過しましたが、我々九州保育関係者は「子どもは国の宝、保育は公が責任を持つこと」を主張し、児童福祉法第二十四条を護ることが出来ました。しかし、今回の新制度では、保育の基準は各市町村にゆだねられ、様々な運用がなされることによって保育環境・保育条件の地域格差や、保育所(園)と認定こども園間の加算要件にも格差が生じています。これまでとは違った保育・教育のあり方をはじめとする様々な変革の中で保育現場は揺れ動き、また、喫緊の重要な課題である保育士等への処遇改善・人材確保の問題など、これらに対する財源確保の課題も残されております。

私たちは保育所(園)がもつ様々な機能を活かし、保育サービスの向上や地域社会への貢献に努めてまいりました。このような中、今回の社会福祉法人改革では、権限を強化された評議員会設置の義務化や事業運営の透明性が求められるなどさらなる社会的な責任が課せられることとなりました。

これまでも九州保育三団体協議会は、保育所(園)における保育の質を高めるため、保育士等の抜本的な処遇改善と職員配置の実態を適切に評価した給付の改善を求め、国や様々な関係機関に対し要望活動を行ってまいりました。今後も児童福祉の向上のため、常に視点を「子どもの最善の利益と育ちを保障する」ことに置きながら、より一層活動していくことが私たちの使命です。

本年四月に発生した熊本地震では、多くの保育所(園)が被害を受け、また保育士も生活基盤が壊された中で、日々の保育をこれまでと変わりなく提供しております。私たちは“九州はひとつ”を合言葉に、手を携えてこの苦境を乗り越えなければなりません。

この大会を機に、九州保育三団体協議会に関わる私たち保育関係者全員が、保育の質を高め、地域社会との連携を図り、子どもの健やかな成長が保障される環境の構築を目指していくことを全国に発信し、努力邁進していくことをここに宣言します。

平成二十八年七月二十二日

第三回 九州保育三団体研究大会参加者一同

研修・一期一会

第3回九州保育三団体 研究大会に参加して

第3回九州保育三団体研究大会が7月20日～22日、九州各県や県外から1500人もの大勢の仲間が集結し、北九州市で開催されました。ソレイユホールを魅了したオープニングでスタートし、式



典では、本大会実行委員長橋原淳信氏から「すべての人が子育てに関わる社会の実現をめざす大会である」と主旨説明もありました。また「九州はひとつ」でありたいという熱き思いを話され、熊本震災への配慮や参加者へのもてなしの心が強く伝わり、研修への期待が膨らみました。

基調講演は、厚生労働省・社会福祉法人制度改革推進室長、田中徹氏による「社会福祉法人改革について」でした。初めに、法人設立時からの経過が語られ、貧困者を対象とした行政措置を中心に行なっていたのが、社会の状況変化に伴い、多様な福祉ニーズに対応して、人々を支援していく位置づけとなった事を知りました。経済情勢が厳しくなった現在、制度改革を行い適正な運営を行うことが求められ、制度改革の内容について、豊富な資料による説明がなされました。私は、社会福祉法人制度の重みを改めて感じ、自分が社会に貢献すべき立場であることを意識する重要な機会となりました。

2日目は、各分科会に分かれての研修でした。私は「配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて」をテーマとした、第2分科会に参加しました。分科会では、



長崎県・ふたば保育園、熊本市・旭保育園、大分県・野口保育所の実践発表がありました。

どの園も、配慮を必要としている子どもが安心して生活できるような、視覚支援や環境づくり、子どもの理解を深め適切な援助につなげる記録と実践、保護者に対する子どもの共通理解と支援の働きかけ等が、試行錯誤や話し合いを重ねながら実践されていました。分科会助言者の、西南女学院大学教授、山根正夫氏からは、インクルーシブ保育についての話がありました。定型発達児と障害のある子どもが関わり合う中でネガティブな印象を与えない事と、子どもの障害に早期に介入す

る事が発達の成果を最大限にするという事を学び、乳幼児保育に携わる私達の責任の重さを感じました。

3日目は、白梅学園大学教授、無藤隆氏による記念講演「今後の保育の体制とその向上に向けて」がありました。幼稚園教育要領・保育所保育指針の改定が進められるなか、双方の教育的内容を同等のものにする事、そしてどう小学校につなげていくかが現在の課題となっているとお話しくださいました。幼児期に子どもが主体的に遊びを発展させる力を身につける事、子ども自身が考えを出し合ったり、友達と関わったりする主体性を育てていく事の重要性を学びました。

大会の最後は、酒井光義大会副実行委員長（北九州市保育所連盟会長）の大会宣言で締め括られました。

セレモニーの中で、次の長崎大会へのパトナタッチが行われ、主催者も参加者も感動のうちに幕を閉じました。今回、多くの仲間に出会い、保育の道を志して良かったという思いと、これからも全国の仲間と共に歩んでいこうという思いで一杯になりました。大会宣言にあるように、参加者全員で保育の質を高めること、子どもの健全やかな成長が保障され環境の構築を目指すことを認識し合うと共に、保育に携わるの私自身、努力していきたいと思えます。

到津保育所 古閑紀代子

支 部

近 況

第11回

若松区篇

若松区はグリーンパークや高塔山などの自然あり、五平太舟の石炭積み出しから始まる近代化の工場ありと、様々な環境に恵まれています。中でも若松の人に身近な高塔山では、6月に「あじさい祭り」、7月に若松みなと祭りで行われる「火祭り行事」、そして昨年10月には「高塔山スマート夜景プロジェクト」が行われました。高塔山は平成25年に「日本夜景遺産（自然夜景遺産）」に認定されたほど夜景がきれいです。その夜景をより美しくするために若松支部に在籍している保育園の子どもたちもその一翼を担い、若松のキャラクター「わかっぱ」の塗り絵を作成後、明かりを灯した作品を展示しました。山の上からの夜景もきれいです。子どもたちの灯した柔らかい明かりは訪れた人を優しい気持ちにしてくれたようです。

若松支部の保育園の中には、あじさい満開の時期に高塔山に行き、若松

に伝わる「河童封じ地蔵尊」の昔話を聞き、展望台から若戸大橋や風力発電の風車など若松ならではの風景を楽しんでいる園や、親子遠足で高塔山に登り、自然を満喫している園もあります。

また、市内の大学の学生たちが若松の有名品? 「わかっぱ」や「とまと姫」「すいか王子」そして本当はやさしい「わるがっぱ」を登場させた絵本を作り、製本をして各保育園に数冊ずつ配布してくださいました。高塔山で一緒に見つけた宝石箱から宝石が飛び散りキラキラ輝く夜景になる「かっぱのかくしたほうせきばこ」というお話です。子どもたちは親しみやすいお話を通し、郷土の文化に触れながら楽しんで読んでいます。



近代化の遺産としては、登録有形文化財の旧古河鋳業ビル内で大正時代の建物の雰囲気味わいながらお弁当を食べ、趣きある社会見学を取り入れている園もあります。

続いては、平成25年2月に新園舎になった二島保育所をご紹介します。若松イオンが徒歩圏内の住宅街にある保育所で、園庭には築山やビオトープがあります。ビオトープにはあめんぼうやちようちよ、とんぼが頻繁にやって来ます。また、めだかが次々と卵を産み、まさしくめだかの学校のように

群れで泳いでいるのを、子どもたちが楽しそうに見ています。

二島保育所は住宅街にありながら自然豊かで、ご近所のおじいちゃんのご厚意により、春のたけのこ掘りに続き、じゃがいも掘り、田植え、稲刈りとたくさん経験させて頂いています。中でもたけのこ掘りは、土からほんの少し頭を出しているたけのこを、年長児がおじいちゃんと一緒にまわりの土を掘りながら上手に収穫し、大切に抱えて保育所に持ち帰り、他のクラスの子どもたちにも得意そうに見せていました。「地域の方から見守られるだけでなく支援を頂き、子どもたちに貴重な体験をさせて頂く事ができ、本当に幸せです」と朝井所長は語っていました。

みなさん、自然と人情に溢れた若松に是非遊びにお出でください。





みんなといっしょに
おふろにはいったよ！
「おおきなおふろ、きもちいいな〜」

(5歳児の作品)

雑感 「虫さんへのまなざし」

昨年度の初めに、園児達に虫さんについて学んでみようと提案してみました。それから半年ほど経って、年長組に虫さんへの手紙を書いてみたらと提案してみました。するとこんな手紙が書かれていました。「かぶとむしさんへ。のこぎりくわがたとたたかつかちましたか。おおさまになれたらよかったですね。なかまのなかにけつこんしたいひとがおつたらかわいいとおもってけつこんしてよ。いっばいいるの」「ぼったさんへ。おうちはどこですか？おうちがあつたらつれていつてね。ばつたとびよんびよんしてあそびたいです」「だんごむしさんへ。なつはすきですか。まるまるのがじょうずですね。てきがきてもにげられるね。なんにんかぞくですか。12にんとか？」「くわがたさんへ。いつもありがとう。すきです。もうしんだのでぶれぜんとをつくりたいです。はさむところかっこいいね」これは家にいたクワガタが死んだので、プレゼントつまりお供え物をしたという事の様です。園庭を見ていると、時々園児が作ったお墓らしきものを見つれることがあります。浅く砂が盛ってあったり、石ころや草花がポツンと置いてあったりです。可哀想と思う心が形となつて表れているのでしょうか。いのち

の尊さを考える機会を持つてもらおうと、園児達に提案したことですが、逆に子どもがまなざしの方が、大切なことを教えてくれているようです。これは年長組だけでは勿体ないと思ひ、年中組・年少組にも、虫さんへのメッセージはないか訊いてもらうよう担当の先生達にお願いしてみました。「むかでさんへ。こんにちは。お家であつたことあるね。少し怖かつたから叫んでごめんね」「みみずさんへ。お外でご飯食べてる時あつたね。お友達になりたいよ。ままごととして今度遊ぼうね」(年中さん)「ちようちよさんへ。ちようちよにご飯をあげたいです。エサはなんですか。ちようちよさんが来たら、ママとパパとみんなプールに入りたい」(年少さん)こんなメッセージを聞かせていただきました。自分を見つめるように他のいのちを見つめるということ。こんな大切なことが、子どもたちの中で違和感なく普通に受け止められていることにはびっくりしました。この大切なまなざしを失わないようにするにはどうすればよいのか。それが私たちの課題だということをお伝えされました。

広済寺保育園

嶋田 崇秀

編集後記 — 立処皆真なり —

立処皆真とは禅宗で使われる言葉です(臨濟録)。その意味するところを植物にたとえるなら、植物の種子は落ちた場所で咲くしかないということです。一粒の種子が大地に落ち、そこからその一生は始まります。落ちた場所がどんな場所であろうと種子の生涯はその場所で全うするしかありません。落ちた場所が生きていくのに不利な場所であろうと、愚痴をこぼすことなく生きていくのです。この、場所を選べないという事が植物最大の強みであるといわ

れています。動物は移動することが出来るがゆえに、環境に左右された生涯となります。常に自分に適した場所を探し求め、合わなくなればその地を去り、新たな場所を見つけねばなりません。人が育っていくこと、それもまた植物の生涯と似ているかも知れません。皆、そこが自分の立つべき場所と信じて生きています。保育の場が、子どもたちがしっかり立てる場所であれと願わずにはいられません。